

卒業するという感動と重み(卒業して, 今。 : 卒業生近況報告)

著者	池田 千代子
雑誌名	日本文学誌要
巻	62
ページ	113-114
発行年	2000-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020137

卒業するという感動と重み

池田 千代子

私は、今年、ミレニアム二千年に日本文学科を卒業したのであるが、卒論は、一九九八年に『好色一代男』の挿絵にみる西鶴の描写力―菱川師宣と比較して―を書きあげている。わりあい、履修に自由がきく通信教育課程に在籍していても、私のように卒論を先に書きあげるという「荒事」を好む人はあまりいないらしい。一九九八年の「日本文学誌要」第五十八号に卒論を載せていただいた時、校正等でお世話になった国文学会事務の和田さんも今回、「え！池田さんは今年卒業ですか。それでは、ぜひ「そとほり」卒業特集に原稿を。」と云う。「日本文学誌要」は論文の終わりに慣例的にひらがなの氏名と卒業年を載せてあるが、和田さんと相談の結果、まだ卒業していなかった私の場合、卒業年は書かないで置き

ましようということになって、第五十八号の卒論特集は当然、私一人、卒業年が載っていないかった。三科目取り残しているの、当然のことであるが、それでも、カッコ平仮名の「いけだちよこ」の名前の下が、なんとなく宙ぶらりんで落ちつきがなく、もの淋しい思いもしたものであった。しかし、卒論を書きあげた喜びと感動と充足感は、確かに、私の今までの人生の中、色々な節目があったが、年月ともに凝縮してゆく「自己達成」という言葉の重みを考慮にいれても五指の内に入るものであったと思う。その後、私は、専門必修以外の不足二科目は、「特別スクーリング」という法政通信教育の中のスペシャルメニューでとった。文学部の中の他学科の講義を履修するのである。門外漢の他学部のも、事前に、与えられた資料を読み、レポートを二十枚書き、基礎的な知識を持った上で、講義に臨む。二泊三日の通学生生の「ゼミ合宿」と同じ齣数でかなりハードである。経済学部の永野則雄教授の会計学を磐梯熱海の温泉付宿舍で、史学部の澤登寛聡助教授の近世琉球史を沖縄の地で学んだ。こ

れらは、すばらしい体験だったし、その時の仲間との交流がまだ続いている。このように私は、文学以外の寄り道をよくしたことになる。それはきっと、私が、法政大学日本文学科の「近世」の講義を初めて受けた時、「皆さん、近世文学を学ぶからには、映画、歌舞伎などの芝居もよく見て下さい。昼間から、映画や芝居にいくのは後ろめたいなんて思わないで。」と、あの頃新進の講師であった日暮聖先生のお言葉を自分勝手に拡大解釈して、文学をするからにはとの名目付きで色々キョロキョロしてきた。その分卒業も遅れたということになる。集中集約して学問するという点でも密度が薄かったかな、と思う。しかしである。「こう有りたいという形を求めて何度でもトライしてください。遅いという言葉を書き辞書から消して。」と「誌要」第五十九号の「そとほり通信」で、日暮聖助教授もおっしゃっている。私は今年、二千年の卒業に際して卒業するという感動を心底味わうことができた。そして、卒業式の当日、日本武道館の椅子に座っている間中、「これで終わりにしたくない。」と思っていた。

私は又、次のステップを求めてトライしてゆくことだろう。こう有りたいという形を求めて！

(いけだ ちよこ 二〇〇〇年卒)

思い出すこと

宮崎 楠緒子

私は、文京区と豊島区の境、旧町名では大塚坂下町という所に生まれ育った。護国寺と豊島ヶ岡御陵の裏手で、古くからの町である。お稲荷さんとその近くの小さな商店街、大正初期かそれ以前のころかと思うが、東大村といって東大の教授達が共同でその辺りに土地を求めたので学者も多く住むという。また最近では銀行や大きな企業の社宅も数多く点在する半下町・半住宅地である。

最近、特に思い出すのが前出の稲荷で毎年秋に行われたお祭りだ。お祭りは毎

年週末に行われ、土曜日昼までで小学校が終わると走ってお祭りに参加する登録をする。揃いの法被を借り受け、午後から御神輿を担いだ。町内を練り歩き、方々での休憩の際に饗される麦茶、アイスキャンディ。祭りが終わるとご苦労さん、とお菓子の詰め合わせと梨を一つづつもらった。それから、夜に行われる縁日のチケット、そして最も懐かしく思い出すのがお風呂券とお蕎麦券だ。お風呂屋さんの入浴券とお蕎麦屋さんで盛りかけが食べられる券。お札のようなちよつと雰囲気のある券だった。友達と連れ立って御神輿でかいた汗を流しに行く。帰りに食べる蕎麦の美味しさ。粋な計らいだったなあと今も楽しく思い出す。八百屋や肉屋など商店街の小父さん小母さんがやってくれた夜の縁日。良く晴れた秋の一日、幼い私が法被に豆絞りの手ぬぐいを鉢巻にして笑いながら駆け回る光景を思い浮かべる。楽しくて楽しくて、一生お祭りと共に暮らしたいと思った。故にか、私は今もお祭りが大好きだ。

永井龍男氏の随筆「東京の横丁」を読んで急に自分の幼少期を思い出した。就

職して三ヶ月、新入社員が陥りがちな五月病だろうか。昔を懐かしむ心を現実逃避とも言えるかもしれないが、本を愛し、文学に親しむこの習いを、私は新社会人としての心の余裕と信じたい。近況報告、法政四年間を経て、すっかり文学好き、本好きに染まり上がりました。おわり。

五月某日記す
(二〇〇〇年卒)

近況報告

安倍 航

三月の二十四日に大学を卒業しました。公務員の試験に失敗した事もあり、卒業したところでまあ何が変わるかと言えは何も変わらない、まるで晴々とした青空を時たま雲が「のたー」と通り過ぎるような生活である。とても就職浪人しているとは全く思えない毎日です。